

照る白くもる白

大佛次郎

上



徳間文庫

徳間文庫



て 照る 日 く も る 日 上

© Masako Nojiri 1989

621-18

1989年1月15日 初刷

著 者 大 佛 次 郎
おさらぎ じろう

発行者 荒 井 修
あら い おさむ

東京都港区新橋四一〇一〇五
発行所 株式会社徳間書店

電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替 東京四一四四三九二番

製 印 刷
本 凸版印刷株式会社

〈編集担当 前島不二雄〉

ISBN4-19-598682-6 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

照る日くもる日^上

大佛次郎

徳間書店

目次

凶兆	5	親ごころ	105
待ち伏せ	14	落葉	113
押込み	26	返事	117
追跡	37	試合	121
鬼薙	44	橋の下	132
月影	50	魔法の杖	144
梟雄	59	木場の夜風	148
屑屋	69	脱出	164
地下道	73	雁がね	175
隠れ家	79	深川の唄	184
奇怪な案内者	85	後門の狼	195
馬瀬源七	91	天眼鏡	207
魔神像	98	加納節哉	240

覚悟	348	新之丞の遺書	322
嘲弄	341	掛合	327
		水の上	309
		手筈	302
		送り狼	296
		節哉	287
		お高祖頭巾	273
		化物屋敷	266
		鶴屋お林	259
		祝言	250
		寂しき道	247

深夜の客	408	混乱	358
		松露の酒蒸	368
		最後に勝つ者	381
		初陣	394

凶 兆

この夕方、程近い八幡はちまんの大銀杏おおいちようこすえの梢を夕焼に燃やして後、冴えざえと秋らしく暮れた空は明日の日和を固く約束していた。暗くなつてからも、たったさつき外から入つて来た男は星が降りそうだと言つて、行燈あんどんの柔かい灯影ほかげにつつまれていた家の中の人々にも、暗い天にしろじろと横たわる銀河の姿を肌寒々と感じさせたのだった。

それから二刻ふたときと出まい。どツと、遠音とおいねに潮騒しほざいとも思われた豪雨が、息づく間もなく襲つて来て家々の薨いらがを鳴らし雨戸を叩たたいた。しばらくは、膝突ひざき合せたためいめいの話も聞き取れぬばかり轟々ごうごうと、さては鳴りはためく雷いかづちに虚空も裂けるかと思われたのである。

かくすることおよそ半刻、けろりと歇やんだ。濡ぬれて重い雨戸をおして開いて見ると、空は高く、外はしんとしていまの騒ぎを夢かと思わせた。落ちかかる半輪の月に照らされて墓地のように町の夜は更けていた。

「魔が通ったのじゃ」

煤けた天井に眸を放ちながら、陰気な声で老婆は呟いた。乾して蔵ったばかりに慌てて引き出して来て吊った蚊帳の内で、子供たちは怯えた目付をして息を殺していた。

子供たちばかりではない、大人の親たちまでが、なにかしら不吉なものを感じていた。時折ぴたぴたと雨後の泥濘った道を通ってゆく寂しい人の足音にも、また、その音を吞んで寂と静まりかえった外の闇にも妙に、心を怯えさせるものがある。

「ばあや」

優しく咎めるように、こう言った声の主の美しい姿は、円行燈の灯影に優しくつつまれて、生え際の形の好い鬢の濃い艶々と結びあげた高髻……読みさしのなにかの本を膝の上に押えながら涼しい目でじつと老婆の方を見返って莞爾したのである。齡は十六と聞く。雨に悩む初花の風情とも言えよう。いじらしいまでの優しさ、あの親爺の……といわれる父はこの市ヶ谷に一刀流指南と筆太く書いた看板を掛け、町道場ながら御府内に名のおった岩村鬼堂という老剣客、狭い汚ない道場ながら五十人に余る弟子のあるのは「実ア十人が九人まで、的はあのお綺麗なお嬢様さ」と、武者窓の下に盤台置いて口さがない魚屋の若い衆の陰口だった。

今夜は鬼堂は留守、がらんとした家の中に、このお妙が雇女の老婆と二人きりで、寂しく父親の帰りを待っていたのである。

「寝てはいやよ。ばあや」

「は、は、はい、……いえ、あのう……」

と狼狽^{ろうばい}して、目をぱちぱちやったが、

「旦那様^{だんな}は？ まだお帰りでございませんか？」

「ええ、ずいぶん遅いこと！ 妾^{わたし}もさつきから案じていますの。今夜は妙に犬がいやな声をして、鳴くんですもの。なんだか落着かない。物騒^{ものさわ}な噂^{うわさ}ばかりあるんですものねえ、夜はお家^{うち}にいて下さらないと、お帰りになるまで心配でいけません。だのに、ばあやったらお仕事を膝に抱えて、こくりこくりおやりだもの。あたし心細くなって……」

「ほ、ほ……どうも……年を取りますと、ついだらしがなくなりまして、お嬢様、御免遊ばせ」

「いいの、謝らなくても……でも、妾、寂しかったわ、こうして独りで御本を読んでいても、妙に森^{しん}と寂しくて、聞くまいと思ひながら自然と耳が澄んで、あるのかないのかわからないような音まで聞えますの。さつきも道場の間を、どうしても誰^{だれ}か歩いているような、みしみしという足音や、そうかと思うと人の息のような……」

「まア、いやでございますこと。ですけれど、そんな！」

「ええ、これがお父様のおっしゃった疑心暗鬼^{ぎしんあんき}というもののなのでしょうけど、よほどばあやを起して見に行こうかと思ひましたの、あら、また犬が鳴いている。いやな声だこと！ お父様

はどう遊ばして、こう遅いのかしら？」

二人は黙って目を見合わせる。

じっと、外の気配に耳を澄ましたのである。

「どちらへ、おいで遊ばしたのでございます？」

「さア……別になんとも仰有^{おつしや}っていらっしやらなかったけれど、また碁のお友達のところだろうと思います」

「さようでございますか……それでこんなに。ほんとうにお帰りになりましたらばあやがよく申し上げましょう。こんなにおやさしいお嬢様にお寂しい思いをさせるなど！」

縫いさしの稽古^{けいこ}着^ぎを膝のわきに置いて、

「ねえ、お嬢様、こんどから旦那様が夜遅くおなりのようなときは、どなたかにお留守番に来て頂こうではございませんか？ どなたか男の方さえいらっしやれば、それは氣丈夫でございます」

「でも、そんな方！」

「いない、と言いかけたのであろう、それをばあやは遮った。

「ございますとも。お宅の直^すぐそばに」

言いかけて、からかうように目を笑わせ、じっとお妙の顔を見て、何気なく美しい顔を挙げたお妙の目が、自分の視線に会って、まごまごして、まるで眩^{まぶ}しいものを見たように俯向^{うつむ}いた

のに、そらと言いかねないばかりに勢いを得た。

「ご存じでございましょう？ お嬢さま！」

「妾、そんな風に言われたってわかりませんの。誰のこと？」

微かな息のようにこう言って、胸高にすっきりと黒天鵲絨の帯に括った靱やかな胴をくの字なりに曲げて、白い美しい襟脚を行燈の柔かい光の戯れに委せたが、さて、その雪のような肌、薄皮一枚下を昇ってゆく淡紅の血の色が、うっすらと、香高い酒の酔いほどに散って見えただのである。

「ご存じないことはございませぬ。お嬢様のおすきな方でございますもの」

「いやよ、妾、そんなこと……知らないったら！ ほんとうにばあやったら」

と、上気した顔を背向けながら声だけは邪慳に言うのを、

「あれ、お怒り遊ばしては困ります。そんな気で申し上げたのではございませぬ」

「だって！」

「でも、ほんとうに、細木様にいらしって頂いたら……」

ばあやは、とうとうその人の名を言ってしまった。

お妙は、俯向いて膝の上にひろげた本の面に、美しい鬢形を影に置いていたというものの、そこに書いてある意味は固より字の形さえ、一度に泳ぎだしたようにぼんやりと霞んで、なにが書いてあるのやらわからない。

「ほんとうでございますよ」

年寄りはいくどく、

「旦那様も、見込みのある若者だ、劍の素姓がよいと仰有つて、お話の出るたびに、きつと褒めておいででございますもの。それに、細木さまもお家は近し、お父様からのお話でしたら、もう、それは一も二もなく、いらしつて頂けます」

「いいわよ、ばあや。御留守番なら妾ひとりでたくさんなの」

お妙が、詰めていた息をほつとさせて、こう言うと、

「でも、たったさっきまでのように、あんなに……」

「いいえ、決してこわくはなかったの」

美しい目が涼しく輝いて、

「ただ、妙にお父様のことが気になって、それに、そらいつかばあやが話してくれたことがあ
るでしょう、御主人が外で死んだと知らないでお家で待っている人たちに、御主人の咳せきばらい
が門口で聞えて、そらお帰りだと思つて開けて見たら誰もいなくて、まもなく思いがけず外で
おなくなりになった知らせが来たとかいう……あのお話を思い出したら、それからそれと、不
吉なことばかり考えられますの。さっき、道場の床板が誰か踏んだように軋きしんだときなど、ぞ
っとしました」

「まア、いやでございますよ。お嬢さま、そんな！……」

「でも、どんなことがあるかわからない世間ですもの。ばあや、妾、このごろつくづく生きて
いるのがこわいような気がするがありますよー」

沁々しみじみとこう言うのを聞いて、ばあやは吃驚びっくりしたように、

「まア、お嬢様のお齡で、そんなことを！ ほ、ほ——まア、お嬢様のように、そんなにお若
くって、お綺麗で……いえ、なんと仰有いましてこれアばあやの欲目ではございません。誰
だってお嬢様の御きりようをお褒めしない者はございません。そんな坊様じみたお考えなど、
およし遊ばせ。お嬢様などがそれでは、他の女たちは、とても生きてはいられません」

ばあやは、さも可笑おかしいというように笑ったのだけれど、お妙の方では、にこりもしない
で、反かえって自分の陰気な考えにじっと引き込まれて行く様子で、眉まゆを曇らせた。

「いいえ、ばあや、それは違います」

「いいえ、違いますとも！ ばあやはお嬢様の三倍も齡を取って、こんなに皺しわ苦茶ちやになるま
でに、それア世間をようく見てまいりました。ばあやの申すことに間違いはございません。お
嬢様のような方がお仕合せにならないで誰しあわが倖あわせになりましょう」

ばあやも、なかなか強気だったが、

「そうじゃないのよ、ばあや。いまはばあやの若いころと時勢が違って来ています。御公儀の
御威勢でさえ、とやこう申し上げる者があるようになったのだから。それに、いまにも戦が始
まりそうな噂うわさじゃアないの？ それでなくとも、辻斬つぎりだの押込みだのと恐ろしいことばかり

あるんだものねえ。確かに人の気も荒く、おそろしいことを平気でするようになっていきますもの。世間の明日もわからないというようなところから、自然そうやって来たようにで気味がわるいのです」

「でも、お嬢様、お父様というお強い方が、ちゃんとおいででございます。御心配は要らないことではございませんか？」

「いいえ、お父様だって……」

お妙は、ここまで言ってから言葉を途切らせ、淋しく微笑した。

「妾、お父様より早く死ねたら、どんなに安心だか知れないと思いますの」

「滅相もございません。お嬢様、そんな……御不孝ではございませんか？ それに、よしんば、お父様に御万一のことがおありなさいましても」

と言いかけて、ばあやは勢いよく、

「お嬢様のようなお方ですもの。どんな立派な旦那様でも、お心のままでございますわ。それを御心配になるなんて、可笑しいくらいでございます」

お妙は自然と顔を赧らめたが、微かに口の中で、

「でも、駄目なの、ばあや」

「それアまた、どうしてでございます」

「妾、どう考えても、自分があまり倖せでなく生れて来たような気がするの。なにかも妾の

思うとおりににはなることがないように思われますの」

「そんな」

「いいえ、いいのよ。別に心配しなくてもいいの、ただ、妾、そんな気がするというだけのことなのです。その代り、妾、自分でも、たいていの辛いことや情ないことは齒を食いしばって我慢して見せます。それだけの力はあるような気がしますから。これで、妾、かなり諦めが
いい方ですもの、まア心配しないでくれ」

ひどく真顔になって、こう言われてみると、老婆もこれまでのように笑いで胡麻化すこともできない心持で、ほんとうにこれから花も実もという方が、なぜそんなに暗く世の中をお考えなさるのかと、怪しみながら気掛りで、思わずお妙を見つめるばかり。元来ならば、心も身体ものびのびと晴れやかな年ごろ、なんの屈託もなく暢氣にしていらっしやれるはず、やっばりお稚さくお母様にお別れなすったせいかな？ と、いたいたしい心持になって来るのだったが、わざと仰山に、

「お嬢様、ただいま仰有ったことをお忘れになつてはいけませんよ。もう直ぐ、ばあやが、それご覧遊ばせ、お嬢様、と申し上げられるようなことになりますから。ええ、ええ、ちゃんと覚えておりますとも」

「ええ、妾も覚えていてよ」

お妙は、花が咲くようににっこりと微笑んだが、

「それにしても、お父様の遅いこと！」

と、またしても暗い顔になる。

「なんぼなんでも、もう、お帰りでございましょう」

老婆も思わず真顔になって言いながら、再び外の気配に耳を澄ました。森として、星のある高い空に風の音を聞くばかり、夜も大分更けたらしい。

待ち伏せ

「おでん燗酒、甘いと辛い」

間の抜けた、眠そうな声で怒鳴って、七輪の下を煽ぐ団扇の音。市ヶ谷御門に程近い濠端の柳の蔭。先刻の夕立を、そこらの家の軒下に避けて、晴れると見て出て来た、お約束の屋台店であった。

「こう、爺つあん！」

突然に声を掛けられて、おでん屋がきょろりとする。声の主らしい人影は、どこにも見えなかった。

「はてな？」

という顔をしたが、化かされたようで、ちょっと無気味になったらしい。前よりも大きく、
「おでん燗酒……甘い辛い！」

やけに大きな声である。

と、またさっきの声がかくつと笑って低い声。

「おい、野暮な声を出しなさんな。近所迷惑な。おおかた、もう寝入った時分だ。」

「へい……」

団扇の手がやんで、

「どなたで……？ どこにおいでなンで？」

と、おっかな吃驚である。

「わからねえかい？」

はいっそう気味が悪い。

「嚇かしちゃいけません。こちらは、しがねえ商売なので。」

「びくびくしたのは手前の勝手だ。こう、ここだよ。」

なるほど、そう言われてみると、傍の土堤の、だらだらと濠の水まで落ちる傾斜に夜風に揺られている草の間に、黒い人の頭がむっくりと起き上った。人間とわかってしまえば、それで安心なようなものだが、さて、また別の不安がある。この夜更けに、露に濡れて、そんな所に寝ている男、どう考えても尋常でない。